

AMR 対策アクションプランに対する当院の成果指標調査

藤井恵太

(兵庫県立淡路医療センター薬剤部)

【目的】

当院では 2018 年から AST で抗微生物薬適正使用に取り組んでいる。今回、AMR 対策アクションプランの成果指標である抗菌薬使用量、検出菌薬剤耐性率について調査したので報告する。

【方法】

抗菌薬使用量について感染管理支援システムを用いて 1)全抗菌薬 2)経口のセファロスポリン、フルオロキノロン、マクロライド系薬 3)静注抗菌薬の 3 項目について 2013 年と 2020 年の AUD を比較した。また検出菌薬剤耐性率および菌別抗菌薬感受性について当院検査部の実績(1 患者 1 分離株 CLSI 準拠)より算出した。

【結果】

抗菌薬使用量

2013 年と比較して 1)全抗菌薬は約 22%減少 2)経口のセファロスポリンは約 93%減少、フルオロキノロンは約 42%減少、マクロライド系薬は約 6%減少 3)静注抗菌薬は約 33%増加していた。

検出菌薬剤耐性率

a)肺炎球菌のペニシリン耐性率：0%、b)黄色ブドウ球菌のメチシリン耐性率：51.9%、c)大腸菌のフルオロキノロン耐性率：32.7%、d)緑膿菌のカルバペネム耐性率：3.2%、e)大腸菌及び肺炎桿菌のカルバペネム耐性率：0%であった。

【考察】

抗菌薬使用量については成果指標を達成しているのが経口のセファロスポリンのみであり、3)については重症患者数増加による影響と考える。また検出菌薬剤耐性率 d)e)について、増悪がないことから抗菌薬使用は概ね適正と考えるが、b)c)について成果指標を達成できていないため、淡路圏域で各施設と連携しながら抗菌薬適正使用に努めていく必要がある。